第29回 平日の午後のコンサート。

2023シーズン開幕!

2023.5.1（月）14:00開演　東京オペラシティ コンサートホール
Mon. May 1, 2023, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈春のイチバン〉〈The Opening Wind of Spring〉

指揮とお話　角田鋼亮　Kosuke Tsunoda, conductor & speaker

ピアノ　五十嵐薫子＊ Kaoruko Igarashi, piano

コンサートマスター 依田真宣　Masanobu Yoda, concertmaster

モーツァルト：歌劇『フィガロの結婚』序曲（約5分）
Mozart: Overture from opera "The Marriage of Figaro"　(ca. 5 min)

リスト：ピアノ協奏曲第1番＊（約20分）
Liszt: Piano Concerto No. 1　(ca. 20 min)

― 休憩 intermission ―

シューマン：交響曲第1番『春』（約32分）
Schumann: Symphony No. 1 "Spring"　(ca. 32 min)

エルガー：行進曲『威風堂々』第1番（約8分）
Elgar: Pomp and Circumstance No. 1　(ca. 8 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために / Dear audience

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪Hold applause please. Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話　角田鋼亮
Kosuke Tsunoda, conductor & speaker

©Hikaru Hoshi

東京藝術大学大学院指揮科ならびにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、ブランデンブルグ交響楽団、札幌交響楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、九州交響楽団等と共演している。大阪フィルハーモニー交響楽団および仙台フィルハーモニー管弦楽団の指揮者のポジションを歴任。現在、セントラル愛知交響楽団常任指揮者を務めており、いま日本で最も期待される若手指揮者の一人として活躍の場を拡げている。2019年「令和元年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞」、2020年「名古屋市文化振興事業団第36回芸術創造賞」を受賞。

ピアノ　五十嵐 薫子
Kaoruko Igarashi, piano

©井村重人

2022年ジュネーブ国際音楽コンクール ピアノ部門第3位。日本音楽コンクール ピアノ部門第3位、併せて最も印象的な演奏に贈られる三宅賞を受賞する他、ピティナ・ピアノコンペティションB級・特級、ショパンコンクールin ASIA、日本ショパンコンクール他数々のコンクールで優勝、入賞。桐朋学園大学を首席で卒業し、皇居・桃華楽堂での御前演奏会に出演。室内楽も積極的に行なっており、徳永二男氏や長谷川陽子氏等と共演している。また、ピアノ共演により2020年日本音楽コンクールにて審査員特別賞を受賞。2010年、2014年桐朋学園特別奨学生、2014～2015年明治QOL奨学生、2016年メンデルスゾーンアカデミー（ドイツ）奨学生、2018、2019RMF奨学生等。

プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

春のおとずれを告げる「第1番」

「春一番」といえば春先に初めて吹く南寄りの強風のこと。気象庁の定義によれば、関東地方の場合、最大風速が秒速8m以上の強風が「春一番」に認定されるのだそうです。これは灌木が揺れるくらいの強風といいますから、なかなかの強風です。本日の公演は、題して「春のイチバン」。シューマンの交響曲第1番『春』を筆頭に、3曲の「第1番」がプログラムに並んでいます。いずれも「春一番」に負けないくらいのエネルギッシュで暖かな風をコンサートホールに運んでくれることでしょう。

指揮の角田鋼亮はセントラル愛知交響楽団常任指揮者を務める若手の実力者。ピアノの五十嵐薫子は2022年にジュネーヴ国際音楽コンクールのピアノ部門で第3位に入賞して話題を呼んだ新星です。春にふさわしいフレッシュな演奏を期待できそうです。

明晰かつ情熱的な指揮に、親しみやすい語り口も人気の高いマエストロ角田鋼亮　©上野隆文

喜びにあふれる軽快な序曲

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が、ウィーンで名声の絶頂を迎えていた頃に書いた傑作が**歌劇『フィガロの結婚』**。原作はボーマルシェの喜劇です。小間使いのスザンナが領主のアルマヴィーヴァ伯爵から誘惑されるも、婚約者フィガロとともに機転をきかせて伯爵を出し抜き、幸福な結婚へと至るまでが描かれます。今風にいえば「ラブコメ」ということになるでしょうか。

幕開けに演奏される**序曲**は、小気味よく軽快。はちきれんばかりの喜びにあふれています。オーケストラのコンサートでもよく単独で演奏される人気曲です。

19世紀音楽界のスーパースターの代表曲

卓越した技術を持つ名人演奏家を「ヴィルトゥオーゾ」と呼びます。ピアニストで歴史上最大の「ヴィルトゥオーゾ」はだれかと問われたら、**フランツ・リスト**(1811-1886)と答えるしかありません。その華麗な超絶技巧とステージ上のふるまいは、聴衆を熱狂の渦に巻き込みまし

リストの故郷ハンガリーの首都ブダペストの風景　©stock.adobe.com

た。リストの演奏に接して失神するご婦人方もいたといいますから、リストは19世紀音楽界きってのスーパースターだったといってもよいでしょう。

そんなリストが**ピアノ協奏曲**を作曲したのは、もちろん自分自身が演奏するため。ピアノ協奏曲第1番は早くからスケッチが書かれ、1835年にひとまずの完成をみます。この時点では伝統的な3楽章構成の協奏曲でしたが、その後、単一楽章の構成に改訂されます。さらに数度にわたる改稿を経て、1855年にようやく作曲者自身のピアノとベルリオーズの指揮によってヴァイマールで初演されました。つまり、20年以上もの年月をかけて完成された労作ということになります。

全曲は切れ目なく続けて演奏されますが、4楽章構成とみなすことができます。

第1楽章　アレグロ・マエストーソ　弦楽器による重々しく決然とした主題で開始され、独奏ピアノが絢爛たるパッセージを奏でます。

第2楽章　クワジ・アダージョ　ゆったりとした幻想的な楽想がくりひろげられます。優美なピアノはノクターン風。

第3楽章　アレグレット・ヴィヴァーチェ　スケルツォに相当する楽章。協奏曲では珍しく、トライアングルが用いられています。初演当時の批評家はこの曲を「トライアングル協奏曲」と呼んで揶揄したといいますが、きらきらとした音色はピアノとの相性も抜群。第1楽章冒頭の主題が力強く再現し、終楽章へと向かいます。

第4楽章　アレグロ・マルチアーレ・アニマート―プレスト　軽快な行進曲調で開始され、これまでに登場した主題を用いながら、華麗なクライマックスを築きます。

人生の「春」の喜びに満ちた交響曲

1840年、**ロベルト・シューマン**(1810-1856)はクララと結婚します。結婚に反対するクララの父と激しい法廷闘争を経た末に、ようやく実現した結婚でした。

その翌年1月、シューマンは詩人アドルフ・ベトガーによる詩の一節「おお、

クララ・シューマンの肖像

変えよ、変えよ、お前の行く手を／谷間に春が萌える」に触発されて、交響曲を書きはじめました。スケッチはわずか4日間で集中的に書き上げられ、約1か月でスコアが仕上げられたといいます。クララとの結婚とベトガーの詩から受けたインスピレーションに後押しされて、はじめての交響曲となる**交響曲第1番『春』**が誕生しました。

当初、各楽章には標題が添えられていました。第1楽章「春のはじまり」、第2楽章「夕べ」、第3楽章「楽しい遊び」、第4楽章「春らんまん」。最終的にシューマンはこれらの標題を破棄してしまいますが、作曲者が楽曲にどんなイメージを託していたのかが伝わってきます。

第1楽章　アンダンテ・ウン・ポコ・マエストーソ―アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ　冒頭のトランペットとホルンによるファンファーレは、前述のベットガーの詩句のリズムに添ったもの。劇的な序奏に続いて、弾むような主題が登場します。春の喜びにあふれる一方、シューマン特有のほの暗い情熱も感じられるのではないでしょうか。

第2楽章　ラルゲット　弦楽器による憧憬に満ちた主題は、シューマンの書いたもっとも美しい旋律かもしれません。

第3楽章　スケルツォ　モルト・ヴィヴァーチェ　一般にスケルツォとはユーモアのある曲を指しますが、シューマンのスケルツォには満たされない熱い想いが感じられます。

第4楽章　アレグロ・アニマート・エ・グラツィオーソ　勢いのある短い序奏に続いて、少しおどけた調子の主題があらわれます。中盤でホルンの呼びかけにこたえるのはフルート。軽やかに春の息吹を伝えます。最後は喜びを爆発させて、力強く曲を閉じます。

日本でもおなじみ、イギリスの「第二の国歌」

イギリスの作曲家**エドワード・エルガー**(1857-1934)の代表作が**行進曲『威風堂々』第1番**。エルガーはいかにも英国的な威厳と気品のある作風の持ち主でしたが、この行進曲も大英帝国の栄光を象徴するような絢爛たる名曲です。「威風堂々」とは、周囲を圧倒するような威厳にあふれた様子をあらわす言葉。シェイクスピアの「オセロ」に登場するセリフの一節、Pomp and Circumstanceに由来する題名です。

曲の冒頭は勢いよく晴れやかに開始されます。小気味の良いリズムが特徴的な2拍子の行進曲ですが、猛然と前進するというよりはむしろ軽快で、うっすらとユーモアも感じられるのではないでしょうか。

中間部には、ゆったりとして格調高いメロディがあらわれます。当時の国王エドワード7世からの要望で、作曲者が愛国的な歌詞を付けて頌歌に仕立てたことから、このメロディは「希望と栄光の国」の題でも知られています。イギリスでは「第二の国歌」として親しまれているそうですが、日本でも学校の卒業式などの式典によく用いられます。また、サッカーの応援歌としても世界中で愛唱されています。

エドワード7世の戴冠式を描いた絵画(エドウィン・オースティン・アビー画)

著者プロフィールは17ページをご参照ください。